シリーズ　子どもが育つ場所を訪ねて

広島大学附属幼稚園

広島県東広島市

日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。
第４回目は広島大学附属幼稚園。豊かな自然の中に教師の願いが漂い、子どもたちがささやかな気配を感じながら心身豊かに育まれている場所です。

広島大学附属幼稚園を訪問したいという思いを、以前から抱いていた。平成二年に広島市から移転したこの幼稚園は、広い園庭と裏手に山をもつ自然豊かな幼稚園であり、「森の幼稚園」構想を立て、子どもたちの心身を育てていこうとしている幼稚園である。教師の思いが自然の中に、ある時は漂い、ある時はしっかりと根付き、子どもたちを育んでいる。そこに私も身を置いてみたいと思ったのである。

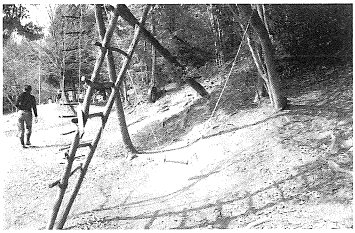
広島駅から山陽本線で西条駅に向かい、バスで15分。バスの左車窓から、遠くに住宅街が見え、反対側には山を背に、広い空間の中に園舎が溶け込んで

いた。周りには、人家も建物も何もなかった。

二月下旬のその日、五歳児は「森の日」だった。「森の日」とは森で一日を過ごす日のこと。私たちも山歩きできるような服装に、運動靴、リュックサックを背負い、同行させていただくことにした。

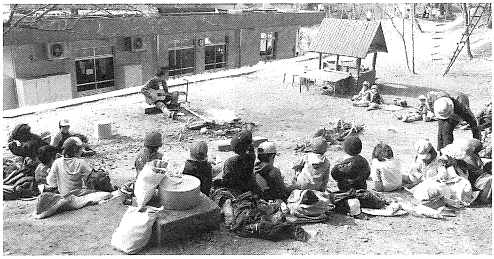
森の一日の始まり

森の入り口は、ちょっとした広場になっていた。五歳児はここに登園してくる。全員がそろうまで、リュックサックを半円形に並べて置き、広場から少し森側にあるさまざまな木の遊具で遊んだり、おしゃべりしたり三々五々に過ごしていた。参観者に気付き、木の遊具に書かれたミッションをやってみせてくれる子もいた。木の遊具は教師たちの手作り。木のことや、子どもの体力のこと、木の扱いがわからなければ、作ることはできない。「○ちゃんならできるんだけど、自分はここまでしかできない」という声が聞こえた。自分のことと友達のことが、よくわかっている子どもたちだった。



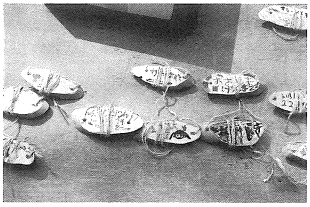
全員が登園したころ、子どもたちはリュックサックの所に戻り、担任のギターに合わせて歌ったり、これからのことを聞いたりして、静かにクラス皆で朝のリズムを整えていった。

茂みの奥には穴が掘られ、足を乗せるための板を渡したトイレが幾つかあった。森で生活していく上でなくてはならないものが、あたりまえに存在していた。



森の達人

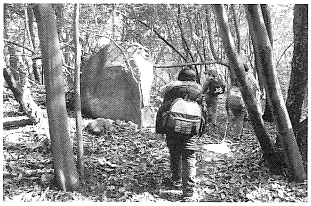
この日は「森の達人」が来園していて、雪で延期になっていた「自分の好きな木に、ネームプレート



をつけよう」という活動内容が伝えられた。森の達人が用意したネームプレートには、子どもたちが自分の名前を書き込んでいた。「森の達人」は、自然の声を通訳したり、森の自然について一緒に考えてくださる方々。何を、どのようにお願いするか、事後にどうつなげていくかなど、語り合いが重ねられ、専門性を教育の意図に織り込むという連携が実現しているのだろう。

さあ、山小屋目指して

リュックサックを背負い、自分のプレートを手にしていざ出発。この日は、山頂付近に年少組を招待する場所を作るというもう一つの目的があった。チームごとに「王様の木」コースか「まじょひろ（魔女の広場）」コースかを決めて登

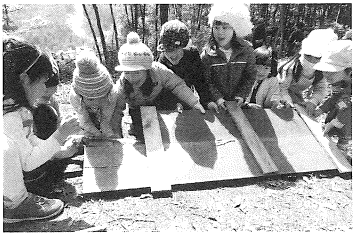


りだした。私は「王様の木」コースに同行するが、坂がきつく落ち葉で足が取られる。「大丈夫？」と声を掛けられる。「疲れた時に効く、いい木があるんだよ」と木肌に王冠が浮かび上がっている王様の木を教えてくれた。「途中で疲れて足が進まなくなった時に触るとパワーをもらえる」ということで、みんな大好きなこの木にプレートがたくさんかけられていた。

頂上到着

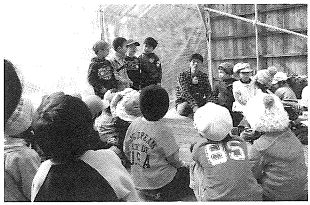
三々五々のペースで登っていった先には、高床式の、一方がふもとに向かって開いている山小屋があった。クラス全員身を寄せ合って入るのにちょうどよい広さだ。荷物を降ろして、これからの作業

を確認する。「もりのレストラン」「みはらしのよいおうち」「すべりだい」などをチームに分かれて造っている。下から運んで来たのこぎり、トンカチ、ボンド、ペン等と、材木とそこに自然にある物とを利用して作業に入った。目的をもち、チームで話し合い造り進めてきているが、壮大な計画で、もしかしたら卒園までには間に合わないのではないかと思えた。造り上げることが最終目標ではないのかもしれない。道具を使いこなし、素材を選ぶ、捨てる、伝える、お互いを尊重する、拒否する、協力する、などの体験一つひとつを大切に味わっているのだろうと、子どもたちと時間、空間を共にして感じた。



私は「みはらしのよいおうち」を造っている三人の女児チームに同行した。山小屋から少し離れた場所で、足場の悪い所を降りていかねばならなかった。四方を切り倒した木で囲われたお風呂に入るように勧められたり、大きな岩の上に案内され、バーベキューを振る舞われたりした。一人がのこぎりで木を切っている。他の二人は、「見晴らしをよくするために、切っているのね」と声を掛けていた。数本切り終わるとみんなでその場所に立ち、見晴らしを確認していた。

その後、弁当前に山小屋に集合し、チームごとに「うまくいったところ・こうしたいと思っているところ・困っているところ」を発表することになった。「みはらしのよいおうち」チームは「見晴らしがよくなりました」「(次は)机といすを作りたい」と発表していた。

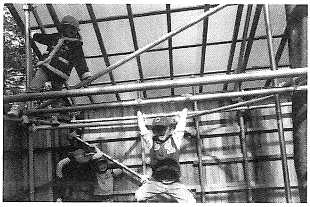


弁当後、担任が「みはらしのよいおうちを見に行こうか」とつぶやくと、三人の女児はうれしそうに先頭を行き、五、六人の友達もついて行った。数本木を切った場所に案内された担任は「本当によい眺

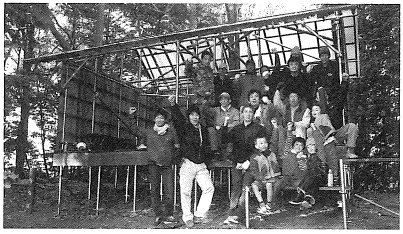
めだなあ」と感嘆の声を上げた。

三人の姿を見ていて、目的に向けてやっていこうという使命感があり、そのプロセスで体験したことはたくさんあったのだろうと感じた。そして体験したことが生きる力になっていくには、仲間や教師の存在が大きいことを改めて感じさせられた。

山小屋は保護者によって造られた



山頂にある山小屋は、保護者（父親の会）の多大な協力を得て、平成二十二年冬に完成した。山を登ってきて、目指す場所としては終点であり、頂上で過ごすための拠点ともなる。斜面を利用した高床式で、潜る、隠れることができる。床下には材木も積まれていた。天井を支える鉄の骨組みは、何とぶら下がることができる。ふもとに向いた面は全部開かれている。はるか下方に、自分たちの生活の基盤である園舎が見える！　開かれた隠れ家的な小屋、それが山小屋の魅力なのだろう。

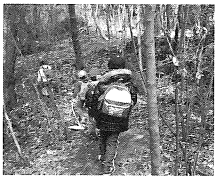


「山小屋への道」という父親の会のお便りを読ませていただくと、子どもたちのため、幼稚園のため、そして、自分たちが満足できるためにという気持ちが込められていることがわかる。幼稚園が掲げる「親子で育つ幼稚園」という願いが、保護者の中にもしっかりと根付いていることがわかる。

子どもたちを育むものは、手付かずの自然だけではない。思いを込めたものの存在は、目に見えない力で、より豊かに子どもたちの心を育んでいく。

いよいよ下山

弁当後は、他チームの出来栄えを見たり、午前中の続きをしたり、谷に下る探検に出掛けたりして過ごし



ていた。下山の時間になり、一度山小屋前に集まってから、チームごとにコースを決めて、下り始めた。私は、行きとは違う「まじょの家コース」を取った。初めて通る者には道なき道を進んでいるように感じられたが、子どもたちの足取りはとにかく速かった。

山を下りながら子どもたちが話している声が、森の中に吸い込まれていく。途中に魔女小屋がある。今は出掛けていていないらしいが、大きな声は禁物とのこと。何でも、魔女が小人を石にしたという言い伝えがあるらしい。ひそひそ声が続く下り道。今は二月末。何度も同じ道を通り、森に親しみ、繰り返されてきた光景だろう。親しんだ場所にいつもの仲間といることで、さまざまな気配が五感に飛び込んでくるのだろうか。ささやかな気配の違いに物語が潜んでいる。

今回の訪問では、「森の幼稚園」構想の実現に向け、自然とのかかわりを大切にしている保育の場をたっぷりと堪能させていただいた。

四季折々の自然に包まれて、入園してからこの幼稚園で時間を重ねて変化していく子どもたちと、「豊かな自然や友達とかかわりながら、その子らしさを発揮し、心豊かにたくましく生きる力を育む」という願いを込めて実践を積み重ねている教師の姿に会うために、何度でも訪ねたい、そんな思いを残した訪問となった。

訪問者／佐藤・高橋

文／高橋陽子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

— 訪問メモ —
訪問時期：2011 年 2 月
訪問場所：広島大学附属幼稚園
〔創立〕1966（昭和 41）年
1990 年現園舎に移転
〔住所〕広島県東広島市鏡山北 333-2
〔電話〕082-424-6190
〔ＨＰ〕yochien@hiroshima-u.ac.jp